

群馬イノベーションアワード2022 トップ座談会①

GUNMA INNOVATION AWARD 2022

起業家発掘プロジェクト「群馬イノベーションアワード(G I A)2022」(上毛新聞社主催、田中仁財団共催)の実行委員と特別協賛社、パートナー企業によるトップ座談会(全6回)が、前橋市の上毛

新聞社で行われた。テーマは「イノベーションの先にあるもの」。第1回は座長の田中仁ジンスホールディングスCEOら11人が、変革の先に目指す未来や目標、取り組みについて意見交換した。

ビルなどの総合建築と建物の梁や柱となる鉄骨製造の2本柱でやっている。大規模な建設会社でも自社で鉄骨がつくれるところはほぼなく、そこが強みだ。

社員や地域に笑顔

G I Aには初回から参加し、今年も区切りの10回目。私も60代に入り、自分に対してイノベーションを起していかなければと思っている。

どんなに人工知能(AI)が進化しても「人」を中心に据えた経営を信じている。建設現場のIT化を進めているが、それが本来の目的ではない。デジタルを活用することで仕事をしやすくし、社員が幸せになることが重要だ。イノベーションの先に、社員や顧客、地域の人々の笑顔をつくりたい。



冬木工業社長 大竹 良明氏



ジンスホールディングスCEO 田中 仁氏

20年前に眼鏡の販売を始めた。変化の激しい世の中で「今のままでは生き残れない」と危機感を持っている。これまでもデジタルを活用し改革を進めてきたが、本質的なイノベーションは見いだせていない。

社長自ら「本気」に

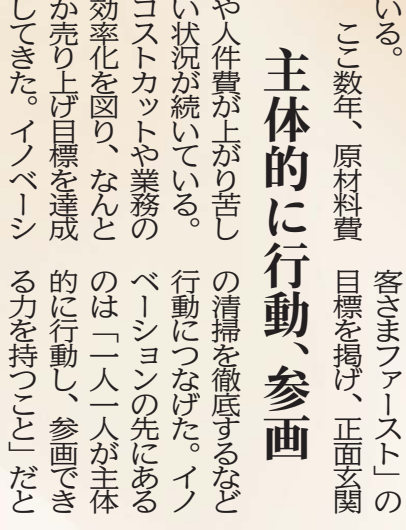
もう一度、初心に戻り「ベンチャースピリット」を取り戻さないと、社員一人一人が関与しているのオフィスから東

京・神田の再開で取り壊しが決まっているビルに移転する。組織は大きく変わるにつれ「誰かがやってくれるだろう」という考えの人が増える。そんな時に成長させたい。

美容室を前橋、高崎、と考えている。今、伊勢崎に5店舗展開している。元々は流行の発信地・原宿で美容師業界に携わってきた。10年ほどして地元に戻り、店舗経営に携わるようになった。来年で20周年に近づいていく。今はSNSの発達により地方でも集客できる時代になっていくが、人の手の温もりを感じるサービスは普遍的な価値がある。

長く働ける環境を

美容師のなり手は減少しているが、長年美容業界に携わってきた「人を美しくする」素晴らしい仕事だと誇りを持っている。美容師が長く働ける環境をつくりたい。今はSNSの発達により地方でも集客できる時代になっていくが、人の手の温もりを感じるサービスは普遍的な価値がある。



エムサロン社長 前原 弘隆氏

前橋で食品製造をしている。主に、群馬名物のもつ煮やホルモン焼きをスーパーマーケットや飲食店に卸している。ここ数年、原材料費、目標を掲げ、正面突進

主体的に行動、参画

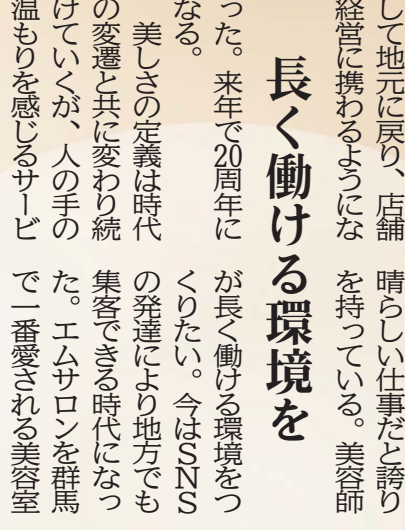
や人件費が上がり苦しい状況が続いている。コストカットや業務の効率化を図り、なんとか売り上げ目標を達成してきた。イノベーションを起したいと思

大きな改革は難しい。小さな変化の積み重ねが大きな変革を起すと思う。社員自ら「お客さまファースト」の目標を掲げ、正面突進

「ビジネスで環境問題でリサイクル業は静脈産業と言われている。この業界は人の力に頼る面が大きく、イノベーションが遅れている。人件費の増大は製造業の産廃処理コストに影響してしまう。デジタル技術を取り入れることでコストを削減し、製造業活性化、経済活性化の一助になりたい。いずれは力のある業界に育てたい。

動脈産業の一助に

近年は従業員も増え、デジタル技術を取り入れることでコストを削減し、製造業活性化、経済活性化の一助になりたい。いずれは力のある業界に育てたい。



群成舎取締役イノベーション事業部長 芝崎 友哉氏

群馬に責任を3年。馬の利益のため、この半。「群馬のために何をしたらいいか」と自分なりに考え、行動してきた。県内には群馬、太田の2支社があり、千

「群馬のため」尽力

近くの従業員が動いてくれる。群馬活性化の一助にと、G I Aに初めて参加させていただいた。機関連投資家として地域のために有効な投資を進めていきたい。



第一生命保険群馬支社長 野田 強氏

前橋で「花助」というフラワーネットワーを運営している。全国の花屋130店舗と事業提携を結び、地域を問わず花を届けている。G I Aには第1回大会から登壇者として参加。その経験が、現在の会社の格をつくったと思っている。

利益で社会に貢献

社会に提供するものを考えることで、ターゲットの顧客や提供するものの価値が見え、利益につながった。花助から花助は社会に何を届けるべきか、何を

川場村で136年。酒蔵を営んでいる。現酒は人をつなぐ存在。在、日本酒全体の市場は縮小し、出荷量はピーク時の4分の1に減少した。弊社は「スパークリング日本酒」だった。県民の皆さま

顧客と語り合う場を

が飲み支えてくれたことに感謝している。これまで以上に本気でお客様と向き合うため、社内にテイスターングサロンを作り、語

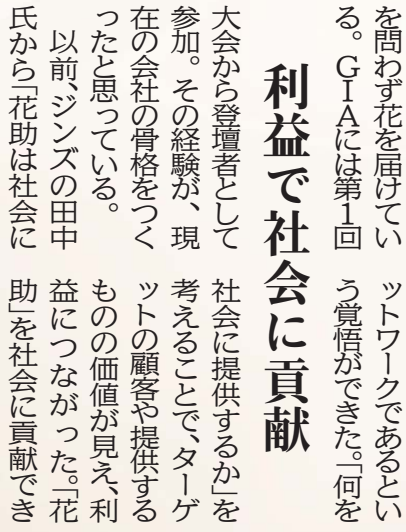


永井酒造社長 永井 則吉氏

こばやし・しんいち 1972年、前橋市生まれ。米国、オランダに留学して花作りを学び、帰国後に花き農家などを経験。2005年に生花店開業。独自に構築した生花店ネットワークで花を届けている。

花助社長

小林 新一氏



まだ「しんいち」1960年、前橋市生まれ。大学卒業後、東京三洋電機・三洋電機で技術職を経て94年に入社。98年5代目就任。前橋をピツパのまちに、煉瓦のまちづくりと併せて群馬・前橋の魅力を全国に発信中

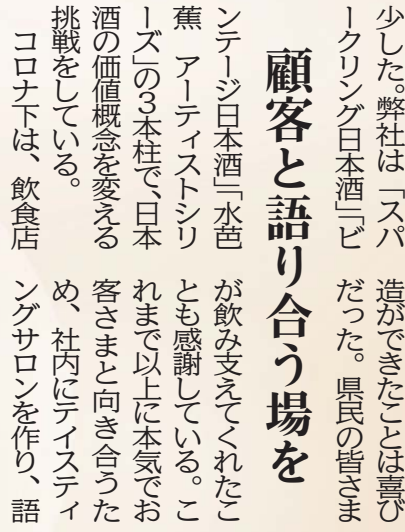
石窯製造の頂点に

1977年に前橋で開業した。現在、煉瓦製造はしていないが、この地れんがを作っている。この分る顧客に提供していることを伝えること、に力を注ぐ。徹底したこだわりの石窯が造れるのは、1基

すし店を桐生と太田、高崎に5店舗と、そのほかに弁当店も経営している。18年前老舗のすし店では当時珍しかった全室個室、タッチパネルのセルフオーダーシステムを導入し、コロナで売り上げが4割減となった。社員一人丸となって改革を進めた。独自のデリバリーやテイクアウト、通販等を始め、売り上げは徐々に戻りつつある。

社員の挑戦を評価

コロナで売り上げが4割減となった。社員一人丸となって改革を進めた。独自のデリバリーやテイクアウト、通販等を始め、売り上げは徐々に戻りつつある。



美喜仁社長 坂入 勝氏

ただで食っていけない。主には石の窯製造に切り替えた。有名飲食店などで石窯の価値が認められたことで、職人の育成にもつながった。

ファイナリスト 16組 決まる

10月22日に行われたG I Aの2次プレゼンテーション審査で、ファイナリスト16組が決まった。ファイナルステージは12月4日、前橋市の日本トータ

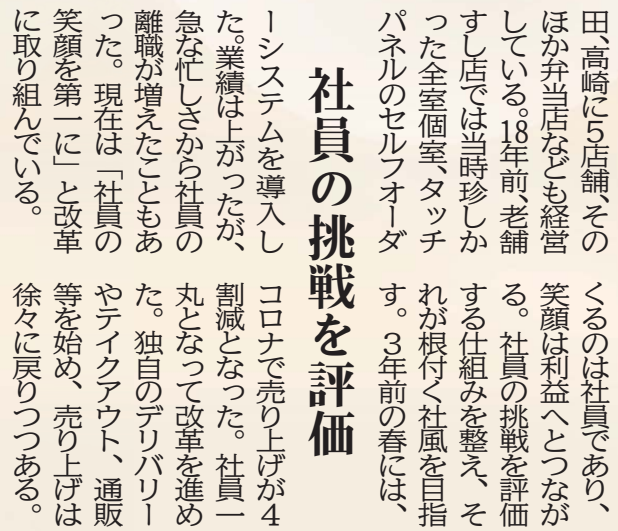


増田煉瓦社長 増田 晋一氏

いかに「たかひる」1971年、栃木県佐野市生まれ。厨房機器大手メーカーの営業を経て2002年に起業。リユース品の販売から始まり今は開業支援からメンテナンスまでトータルサポートを手がける。

飲食店をサポート

上から、お客さまの要望に何でも対応した。そこから業務の幅が広がって、店舗リフォームや内装まで手がけるようになった。コロナで売り上げが下がらないかという思いから、コンサルタント事業を考えている。社内にはキッチンを置き、開店前の店主が実践的に学べる場を提供したい。



ユナ厨房社長 五十畑 隆宏氏

館林で飲食店向けに厨房機器の販売、施工、メンテナンスを請け負っている。20年前に脱サラをし、厨房機器のリース販売を始め、当初は売り上げが「もった店主の役に立たないか」という思いから、コンサルタント事業を考えている。社内にはキッチンを置き、開店前の店主が実践的に学べる場を提供したい。

ファイナリスト 16組 決まる

10月22日に行われたG I Aの2次プレゼンテーション審査で、ファイナリスト16組が決まった。ファイナルステージは12月4日、前橋市の日本トータルサポートを手がける。

変革の先見据え前進